
未来図書館

阿井植夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来図書館

【NZコード】

N3197H

【作者名】

阿井植夫

【あらすじ】

友人の謎の死を探つて図書館まで来た主人公。そこで見つけたのは一通の手紙だった。昔の言葉で書かれていて何のことか分からない。しかも、古語辞典にも載つていない言葉が使われていた。

ログをたどつてきて、たどり着いた先は図書館だった。
テスト前なら勉強する生徒で混みあつてゐるが、今は時季外れで人
気はない。

ドアの脇の壁にエコカードを押し当てる。
ピッという音とともにロックが解除された。
ゆっくりとドアに力を込めると音もなくドアが開いた。

見える範囲には誰もいない。

広いロビーを横切つて階段を下つた。

ここは電動書架が設置されている書庫だ。

角の端末で教員用のファイルに無理やりアクセスして彼女の名前で
検索した。

思えば私にハッキングを教えたのも彼女だった。

春の大型連休も終わりクラスの連中はだいたいどこかのグループに
属していた。

私はどこにも属さずにただ何気なく外を眺めていた。

「ねえ君、君も大変そうだけどさ、女の子も色々と大変だよね」
その日、はじめて彼女に話しかけられた。

言つてゐることは大抵意味不明だったが、不思議と悪い気はしなかつた。

「君は本とか読むの？ それとも書くの？」

彼女は私のことを君と呼んだ。

一応、自己紹介したのだが、私の名前を聞いて「その顔でえー」と
言つていた。

私も自分の名前は妙にかわいらしくて嫌いだ。
だからどう呼ばれてもあまり気には留めなかつた。

その代り私も彼女のことと遠慮なくミキミキと呼ぶことにした。

ミキミキとは色々なことを話した。

好きな本のこと、好きな音楽のこと、そして好きな人のこと。
繊細とか細やかとかいう性格とは違うけど不思議と悪いやつといふ
感じはしなかった。

ミキミキと出会ったおかげでこれからは退屈せずに済みそうだと思
つていた。

あれは、突然夏が狂ってしまったかのように肌寒い日だった。
ミキミキは死んだ。

びっくりした。

どうして死んだのかはよく分からぬ。

呼ばれたお葬式では確かにミキミキは棺桶の中でやさしつに冷た
くなっていた。

どうして死んでしまったのだろうと私はそればかり考えていた。
色々なことがクラスで噂になつたようだが、すぐに夏休みになつて
しまい、後は忘れられるのを待つばかりであった。

あつた。

ミキミキが借りた本のリストだ。

亡くなつたちょうど一週間前に本を借りている。

ミキミキは亡くなる直前に何かを調べていたらしいのだ。

私もそれが気になつて調べていた。

そしたらここにたどり着いた。

スイッチを押すと電動書架が移動する。

目的の本はこの先だ。

こうしてみるとお掃除プログラムが働いているため設備自体は清潔
を保つているが本の方はどれも歴史を感じさせるような雰囲気があ
つた。

そもそも、こうして紙に印刷して作られた本はもう古いものしかあ
りえないものである。

F列の043はこの本だ。

手に取つてみると埃がかぶつているとかそういうことはなく清潔そのものである。

しかし、紙の方は明らかに古いものであるところがよく分かった。

夏休みの図書館の勉強スペースは誰も使つものがいないのか、どの机も照明が消えていた。

椅子に座り本を前にしてしばらく考えた。

いつたい何の目的でミキミキはこの本を借りたのだろうか。本の表紙には古い言葉で題名が書いてあるようだつた。

考えてもよく分からないので照明のスイッチを触つて明かりをつけた。

中をのぞいてみると何やら書かれている。

からうじて自分の国の言葉であることは分かつた。

しかし、内容を読むことはできなかつた。

わけも分からずパラパラとページをめくつていつた。

本の真ん中ぐらいのページになつて何かが挟まつていが分かつた。

それは紙の袋に紙片が入つてゐるものだつた。

すぐにはじめ端末を使って検索した。

ニア・レーザ・ファイル
ALFに映し出されたものは今日の前にあるものとそつくつな形をしていた。

これは手紙というものらしい。

昔の通信手段だ。

紙でできた封筒にこれまた紙でできた便箋を入れて使うらしい。

この本に挟まつていた手紙にも便箋が入つていた。

何やらまた古語のような言葉で書かれていて内容はよく分らない。

私は本の貸し出し手続きをとつて、すぐに国語科の準備室に行つて

先生に質問してみた。

先生が書いたのは、この本は昔の言葉と書かれた本であるということだった。

手紙の方は辞書にも載っていない単語がたくさん使われていて内容はよく分からぬが、やっぱり本の内容に関するものなのではないかということだった。

「先生、だえまおはぎつ……ところのはぎつこの意味ですか」「違う、昔の文章は縦に読むのが正しいんだ。せん、ここは『こんなにちば』って書いてあるだ」

やはりこの手紙が鍵になつてくるようだつた。

私はこれを調べることで『キミキの弔い合戦』のような気分になつていた。

夏休みが終わるまであと一週間。

それまでにこの謎を解いてみせるつもりだ。

ミキミキもきっと天国で応援してくれているだらう。ひょっとしたらミキミキが亡くなつた理由も分かるかも知れない。最後にこの文章を読んだ人にも謎を解く手助けをしてもらわればと思つて、意味不明な手紙の内容を書いておきます。

こんなにはわたしは ことだまつかいです
るよんり しうよこ この てみがを よんと みな
しでんから きこづても おいそがな
てばんつ だと おつもて くさだい
やるめなら いまの うちだ
るいは とをもよぶ とういだろ
つぎに おえまが てんに めれわるまで にしうつかんだ
ぎわく だけが のこる わけだ
はやく やたりい ことを やつおこた ほがうい
おわりは まなもく やつくる

まかえら おれは にげんんが きいりだ
えんまさまの まえで ひまざすけ
だかれが たけすて ぐるれと おうもなよ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3197h/>

未来図書館

2010年12月10日23時43分発行